

4/25 SAT

4/26 SUN

4/29 WED・THOL

岡山市立オリエント美術館 地下講堂

岡山市立オリエント美術館 地下講堂

岡山芸術創造劇場 ハレノワ 小劇場

10:00 - 11:33

A 『息の跡』

12:00 - 13:13

B 『空に聞く』

14:00 - 15:08

C 『かげを拾う』

15:20 - 16:40

〈アーティストトーク〉

小森はるか

9:15 受付開始 各上映開始時間15分前に開場

10:00 - 11:44

D 『the place named』

+ 『波のした、土のうえ』

13:00 - 14:19

E 『二重のまち／交代地のうたを編む』

14:30 - 15:50

〈対談〉

小森はるか+小林清乃（現代美術作家）

会場移動

奉還町4丁目ラウンジ・カド

17:30 受付開始・開場

18:00 - 19:10

F 『ラジオ下神白ーあのときあのまちの音楽から いまここへ』

19:15 - 20:00

〈対談〉

小森はるか+アサダワタル（文化活動家）

12:30 - 14:25

G 『阿賀に生きる』(特別上映)

※16mmフィルム上映

15:30 - 16:34

H 『春、阿賀の岸边にて』

17:00 - 18:33

I 『おさがりんちょ』

+ 『いつも茶畑で歌っていた』

18:40 - 20:00

〈対談〉

小森はるか+小田香（フィルムメーカー／アーティスト）

ご鑑賞当日午前9:15より、その日すべての上映回の受付および当日券を販売いたします。開場は各上映開始時間の15分前を予定しています。 ※26日(日)ラウンジ・カドのみ、17:30の開場とあわせて受付を開始いたします。

鑑賞料金(1プログラム)

一般1,200円(当日1,500円) 学生・シニア・障がい者1,000円 (事前予約優先/全席自由席/整理番号順) ※26日(日)ラウンジ・カドのみ、別途1ドリンクオーダー制

予約方法

Googleフォーム、またはメール・SNSのDMにてご予約ください。〈メール・DMでの予約〉 お名前/人数/希望プログラム(A~I)をお知らせください。



Google フォーム



Instagram



X

アクセス

【岡山市立オリエント美術館 地下講堂】 〒700-0814 岡山市北区天神町9-31 JR 岡山駅東口より徒歩約15分 路面電車利用の場合:「東山」行約5分 →「城下」下車 徒歩約3分

【奉還町4丁目ラウンジ・カド】 〒700-0026 岡山市北区奉還町4-7-22 JR 岡山駅西口より徒歩約15分

【岡山芸術創造劇場 ハレノワ 小劇場】 〒700-0822 岡山市北区表町3-11-50 JR 岡山駅東口より徒歩約30分 路面電車利用の場合:「東山」行約7分 →「西大寺町・岡山芸術創造劇場ハレノワ前」下車 徒歩約5分 「清輝橋」行約7分 →「大雲寺前」下車 徒歩約5分

記憶と記録のあわいをみつめて

小森はるか 作品集

4/25 SAT
4/26 SUN
4/29 WED・THOL

映像作家・小森はるかの特集上映を開催します。東日本大震災後、ボランティアとして東北を訪れた小森は、のちに岩手県陸前高田市へ移住。その土地で暮らしながら、災禍の後を生きる人々の語りや暮らし、被災地の風景をカメラで記録し始めました。

自らを「旅人」と位置づける小森は、その後も拠点をついて仙台や新潟へと移しながら記録活動を続けています。近年は、映画『阿賀に生きる』の発起人である旗野秀人さんの活動を追う作品を発表するほか、活動初期から協働している瀬尾夏美とのアートユニットでは、国内外に赴いてリサーチを行い、制作と対話の場づくりを行ってきました。

本特集上映では、小森が制作した10本の映像作品に加えて、佐藤真監督の『阿賀に生きる』を16mmフィルムで特別上映。さらに、同時代に活躍する現代美術家の小林清乃、文化活動家のアサダワタル、フィルムメーカーの小田香を招き、小森との対談も実施します。上映や対談を通じて、2011年から現在に至るまでの小森の仕事を迎えることは、災禍の記憶や体験を受け継ぐ人々の営みを考える機会にほかなりません。当事者・非当事者を問わず見て、聞いて、語り合う場をひらくことにより、様々な土地の記録が、私たちの記憶と共振することでしょう。

小森はるかの稀有な作品群を一挙にご覧いただける3日間。東日本大震災から15年を迎え、忘れてはならない記憶と出会い直す機会となれば幸いです。

A 息の跡

2016 | 93min

陸前高田の荒涼とした大地に、ぽつんとたたずむ一軒の種苗店「佐藤たね屋」。津波で自宅兼店舗を流された佐藤真一さんは、その跡地に自力でプレハブを建て、営業を再開した。また佐藤さんは、みずからの体験を独習した英語で綴り自費出版していた。記憶と記録のあわい。かすかな痕跡とぬくもりを映画は写す。



©2016 KASAMA FILM + KOMORI HARUKA

B 空に聞く

2018 | 73min

東日本大震災の後、約三年半にわたり「陸前高田災害FM」のパーソナリティを務めた阿部裕美さん。地域の人びとの記憶や思いに寄り添い、いくつもの声をラジオを通じて届ける日々を、カメラは親密な距離で記録した。津波で流された町の再建は着々と進み、嵩上げされた台地に新しい町が造成されていく光景が幾重にも折り重なっていく。



©KOMORI HARUKA

C かげを拾う

2021 | 68min

仙台在住の美術作家・青野文昭さんの制作風景を追ったドキュメンタリー。せんだいメディアテークでの個展にむけて青野さんが取り組んでいた、仙台市八木山と岩手県宮古市を舞台とした新作制作の中で、「拾う」「なおす」行為にカメラを向けた。「青野文昭のもの、ねむり、越路山、こえ」の関連企画として本作を上映。



©Komori Haruka

小森はるか（こもり・はるか）1989年静岡県生まれ。映像作家。東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了。映画美学校フィクションコース初等科修了。東日本大震災後、ボランティアで東北を訪れたことをきっかけに瀬尾夏美（画家・作家）とアートユニットとして活動開始。2012年、岩手県陸前高田市に拠点を移し、人々の語り、暮らし、風景を映像で記録している。2022年～新潟在住。一般社団法人NOOK（のおく）に所属。代表作に《息の跡》（2016年）、《空に聞く》（2018年）など。《二重のまち／交代地のうたを編む》（2019年／瀬尾夏美と共同監督）は、ジュフィールド国際ドキュメンタリー映画祭コンペティション部門特別賞、令和3年度文化庁映画賞文化記録映画優秀賞を受賞。《春、阿賀の岸辺にて》（2025年）にて、恵比寿映像祭 2025 第2回コミッション・プロジェクト特別賞受賞。

D the place named

2012 | 36min

ソートン・ワイルダーの戯曲「わが町」をもとに、田舎町で暮らす少女の一日と「わが町」第3幕を稽古する劇団員たちが交互に描かれる。死者が生者の世界について語る台詞を練習する声が、田舎町の日常に重なり、演じる役者自身にも投影される。脚本段階から出演者とともに制作。



©Komori Haruka

D 波のした、土のうえ

小森はるか＋瀬尾夏美

2014 | 68min

2014年、陸前高田ではいよいよ復興工事が本格化。風景が塗り替えられる前に、まちの人たちと一緒にかつての町跡を歩き、この場所どこ思い出される記憶や、いま抱えている感情などについて、話を聞かせてもらう。そこから瀬尾が物語を書き、ご本人とともに訂正や書き換えを行なったうえで朗読をしてもらい、小森がその声を頼りにしながら、この町の風景や時間を重ねるようにして映像を編んでいく。



©Komori Haruka + Seo Natsumi

E 二重のまち／交代地のうたを編む

小森はるか＋瀬尾夏美

2019 | 79min

2018年、4人の旅人が陸前高田を訪れる。まだ若いかれらは、“あの日”の出来事から、空間的にも時間的にも、遠く離れた場所からやって来た。大津波にさらわれたかつてのまちのことも、嵩上げ工事の後につくられたあたらしいまちのことも知らない。旅人たちは、土地の風景のなかに身を置き、人びとの声に耳を傾け、対話を重ね、物語『二重のまち』を朗読する。他者の語りを読み、伝え、語り直すという行為の丁寧な反復の先に、奇跡のような瞬間が立ち現れる。



©KOMORI Haruka + SEO Natsumi

F ラジオ下神白

一あのとときあのまちの音楽から いまここへ

2023 | 70min

いわき市にある福島県復興公営住宅・下神白（しもかじろ）団地には、2011年の東京電力福島第一原子力発電所事故によって、浪江・双葉・大熊・富岡町から避難してきた方々が暮らしている。2016年から、まちの思い出と、当時の馴染み深い曲について話を伺い、それをラジオ番組風のCDとして届けてきたプロジェクト「ラジオ下神白」。2019年には、住民さんの思い出の曲を演奏する「伴奏型支援バンド」を結成。バンドの生演奏による歌声喫茶やミュージックビデオの制作など、音楽を通じた、ちょっと変わった被災地支援活動をカメラが追いかけた。



©Komori Haruka + Radio Shimo-Kajiro

アサダワタル

文化活動家／アーティスト、文筆家、近畿大学芸学部准教授、古書レコード店〈とか〉オーナー。1979年大阪生まれ。滋賀県立大学大学院環境科学研究科博士後期課程満期退学。博士（学術）。これまでにない不思議なやり方で他者と関わることを「アート」と捉え、全国の福祉施設や復興団地でプロジェクトやワークショップを実施。その経験を著作や音楽作品として発表している。2019年より品川区立障害児者総合支援施設ぐるっばにて、公立福祉施設としては稀有なアートディレクター職（社会福祉法人愛成会契約）として3年間勤務した後、2022年に近畿大学教員に。著作に『当事場をつくるケアと表現が交わるころ』（晶文社）、『住み聞き増補版もう一つのコミュニティづくり』（筑摩書房）、『想起の音楽表現・記憶・コミュニティ』（水曜社）、『オール・プリアート日本』（平凡社、編著）など多数。CD作品『福島ソングスケイプ』（アサダワタルと下神白団地のみなさん）でグッドデザイン賞 2022受賞。東京芸術劇場社会共事業企画委員。ホームヘルパー2級取得者。

小林清乃（こばやし・きよの）

現代美術作家 | 在野の調査研究者。失われていく「声」に耳を澄ますこと、それらと交信することをテーマに、インタビューやフィールドリサーチ、アーカイブ調査を通じて歴史の記述から埋もれた証言や事象、物語を掘り起こす。テキストや写真、映像、マルチチャンネル音響などを用いた制作を行う。特に触れることも視認することもできない音響としての「語り」の研究を通して、新たな口伝えの形態となりうる表現を探索している。戦時下の女性たちによって書かれた手紙の声の重なりを扱った《Polyphony1945》、星の運行の視座から原発事故後の人間と家畜動物の関係性を考察し再話するプロジェクト《永い時間と牛飼いの方角、光の声》などを制作。主な展覧会に「書かれる手、跳ねる魚が飛び去ったあとでさえもなお | Polyphony1945-HIROSHIMA 編-」（gallery G / 広島, 2025）、「コロギネの解剖学」（山武市百年後芸術祭 / 千葉, 2024）、「Polyphony1945」（資生堂ギャラリー / 東京, 2019）、「インタビューセッションセラピー交わるとき、あなたの語ることの声」（Yale Union / 米国, 2018）など。

G 阿賀に生きる

◎特別上映

佐藤真

1992 | 115min

※16mmフィルムで上映予定

豊富な水量や豊かな自然を誇ることで知られ、1960年代に端を発する新潟水俣病の舞台にもなった新潟県・阿賀野川の流域に暮らす人々にスポットを当てたドキュメンタリー。本作が長編デビューとなる佐藤真監督ら7人のスタッフが3年にわたって同地で共同生活を送り、住人たちの生活に密着。川とともに生きてきた人々の日常をありのままに映し出すと同時に、その一方で彼らが水俣病の被害者家族であるという現実にも迫る。



©オホマフィルム

H 春、阿賀の岸辺にて

2025 | 64min

新潟水俣病の患者運動の支援者、旗野秀人さんは映画『阿賀に生きる』（1992年／佐藤真監督）の発起人。現在も「冥土のみやげ」という名の“文化運動”を一人で続けている。映画の公開から30年近く経過し、多くの出演者、関係者たちがこの世を去ったいまも、旗野さんは毎年春に映画を上映し、亡くなっていった患者たちを偲ぶ追悼集会を呼びかける。また、聞き書き集を編み、お地蔵さんや、絵本をプロデュースするなど、あらゆる記録媒体を使って後世の人々に新潟水俣病を伝えていく。阿賀。

震災後に『阿賀に生きる』を観て影響を受けた監督の小森はるかは、旗野さんに惹かれ、阿賀川流域へ移住して撮影を続けてきた。時代の流れとともに変わらざるを得ない支援の形と、それでも終わりを迎えることのない文化運動。本当の支援とは何か。死を別れとはしない、そばに居続ける人の50年の歩みを映し出す。



©Komori Haruka

小田香（おだ・かおり）

1987年大阪府生まれ。フィルムメーカー／アーティスト。タル・ペーラ主宰の映画教育プログラム film.factory 第1期生。長編デビュー作『蟻 ARAGANE』（2015）が山形国際ドキュメンタリー映画祭・特別賞を受賞。続く『セノテ』（2020）『GAMA』（2023）などでも高い評価を受け、2020年に第1回大島渚賞、2021年には芸術選奨文部科学大臣新人賞（映画部門）を受賞。最新作『Underground アンダーグラウンド』（2024）はベルリン国際映画祭フォーラム部門に出品。土地や記憶、不可視の歴史を掘り下げる独自の映像表現を探索している。

佐藤真（さとう・まこと）

1957年青森県弘前市に生まれる。東京大学文学部哲学科を卒業。1981年、『無辜(むこ)なる海—1982年・水俣—』（監督：香取直孝）に助監督として参加。1984年同作品の自主上映の旅で新潟県阿賀野川とそこに暮らす人々と出会い、映画作りを決意する。1989年からスタッフ7名で阿賀野川流域の民家で共同生活をしながら撮影し、1992年『阿賀に生きる』を完成させる。長編映画初監督にして、ニヨン国際ドキュメンタリー映画祭銀賞ほか4賞受賞、サンダンス・フィルム・フェスティバル IN TOKYO グランプリ受賞、文化庁優秀映画作品賞など国内外で高い評価を受ける。1996年（有）カサマフィルム設立。1999年よりNPO法人映画美学校ドキュメンタリー科専任講師となり、2001年には京都造形芸術大学の教授に就任。著作に「日常という名の鏡—ドキュメンタリー映画の境界—」（1997）、「映画が始まるころ」（2002）など。2007年9月4日急逝。

おあがりんちょ

2026 | 56min

新潟県阿賀野市に住む中村美奈子さんの日々を記録している。『春、阿賀の岸辺にて』の主人公・旗野秀人さんの妹。母の生き方を受け継ぐように、畑を耕し、本を読み、干し柿をつける。暮らしの中で抵抗を続ける身体を見つめた。



©Komori Haruka

I いつも茶畑で歌っていた

2026 | 37min

小森自身の父の実家である静岡県川根本町・地名（じな）で始めた記録。父たちは茶農業を営んできたが、工場の閉鎖をきっかけに存続の危機が訪れた。茶畑の風景とともに、父と伯父がつくり続けてきた故郷の歌など、小森家のみなさんにもカメラを向けた。



©Komori Haruka